

平成30年9月27日(木)

老球の細道438号

選手の育成は「心の育成」

会津バスケットボール協会 室井 富仁

お彼岸の2日間、ミニバスケットボールの講習会に明け暮れた。のべ200人以上の小、中、高校生に基本を中心に指導したが、集中して一生懸命練習する子どもたちの姿を見ながら、将来どのように成長するか想像する楽しみを味わった。コーチの特権である。

その中で久しぶりにホットなニュースを耳にした。渡部大介コーチ率いる「川南ミニバスケットボール」チームのA君がU-12日本代表で韓国に遠征することだ。A君は小学6年生で身長は170cm近くあるが、サウスポーで動きも機敏、性格も素直で将来有望な選手である。今後順調に育つよう周囲の良好な環境設定を期待する。

とかくミニの世代でトップレベルにできあがってしまうと、本人、保護者、コーチなどが満足してしまったり、ひどい時は勘違いして鼻が天狗のようになってしまふことが、ままありがちである。せつかくの才能、可能性をその後伸ばすことができず、高校、大人になったら普通の選手で終わってしまったということがある。指導者はこのような優秀な選手を伸ばすためにも大切に育てなければならない。キーポイントは「心を育て、人間性を高めること」である。普通の選手を凄い選手に育てるときも同じ原則である。

プロ野球の日本ハムファイターズは「いい選手を生み出すためには、素材も大切であるが、それを生かす土壌がなければならない」と、プロ野球では珍しくチームに「選手教育ディレクター」という役職を置いて、スカウティングと選手育成の相互作用を図っているという。「野球だけをやっていればいいという発想では、選手としての伸び率に影響する」。そう考えた球団は、人としての社会性を重視する選手教育を盛り込んだ。

具体的には、人間性を重んじることと主体性を高めることの二本柱で取り組む。靴を揃える、ごみの分別というごく当たり前のことと目標設定と練習日誌をつけること、そして読書の習慣をつけることだそう。かつて同じようなことを「心作り6つの習慣」として私自身が取り組んだことがあった。コーチ、選手両方の心の育成に十分通用する。

- ①心を使う：練習日誌をつける。思っていることをノートに書く。考えていること(思い)を結晶化させて文字にする。イメージが鮮明になり、鮮明になるほど現実化しやすい。
- ②心をきれいにする：清掃、奉仕活動にいそしむ。靴を揃える。謙虚で素直な心ができあがり、他人の話が心に入っていく。
- ③心を強くする：今やっていることを継続する。続けた日数に比例して心が強くなる。やれた自分に自信を持つようになる。継続は力なり。
- ④心を整理する：マイナス思考の文字、言葉を使わない。勝つ人は過去の失敗や後悔、椅子は引きずらない。トステインは「疲れた」の言葉を使ったことがない。
- ⑤心を広くする：「ありがとう」と言ったぶんだけ、あいさつを先に言ったぶんだけ心が広くなり、ちっぽけなことでクヨクヨしない、いらつかない。目指すは世界。
- ⑥楽しむ心：辛いこと、苦しいこと、単調なことを楽しんでやる、楽しむ工夫をする。楽しんでいる人には所詮かなわない。

心が育ち、人間的に大きくならなければ、凄い選手、凄いコーチにはなれない。人間ドックの結果に一喜一憂する私はまだまだ。栄光への道、限りなく遠い。今日の一步で。